九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

コメディー ・フランセーズの沿革

進藤, 誠一

https://doi.org/10.15017/2557053

出版情報：文學研究. 15, pp.1-24, 1936-04-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

文學研究　第十五輯　（昭和十一年四月發行）

コメディー・フランセーズの沿革（承前）

進藤誠一

七

第四、パレー・ロワイヤル劇場時代

前記の如くプチ・ブルボン劇場の取毀ちに遇つたモリエール一座は、ルヰ十四世の特別の配慮によつて、パレー・ロワイヤル（le Palais-Royal）の中の劇場を使用することになつた。このパレー・ロワイヤルといふ宮殿は、ルーヴル王宮の間近く、現今參議院（le Conseil d'Etat）と美術局（le Sous-Secrétariat des Beaux-Arts）との兩官衙及び、テアートル・フランセーとパレー・ロワイヤル劇場との二劇場を含んでゐる宏壯な建物の在る地域に在つた。この宮殿の建設者はリシュリュー僧正であつた。一六二四年以來僧正はこゝに自分の住居を建造せしめたのであつた。當時は僧正宮（le Palais Cardinal）と呼ばれてゐた。彼は一六四二年この宮殿で歿したが、これに先立つて一六三六年に彼は王室にこの宮殿を献じてゐた。一六四三年、ルヰ十三世の崩ずるや王太后アーヌ・ドートリッシュ（Anne d'Autriche）は當時五

歳であつたルヰ十四世とその弟フィリップ（Philippe d'Orléans）とを伴つてこの宮殿に移り住んだ。パレー・ロワイヤルの名はこの時以來始まつたのである。フロンドの内亂の後巴里に戻つたルヰ十四世は再びパレー・ロワイヤルに住まず、ルーヴル宮の方に住まつた。そしてパレー・ロワイヤルは英國王チャールズ一世の寡婦アンリエット・マリー（Henriette-Marie de France）に貸し與へられた。王弟フィリップが一六六一年アンリエットの王女アンリエット・アーヌ（Henriette-Anne d'Angleterre）とこの王宮で結婚式を擧げ、爾來パレー・ロワイヤルはオルレアン家の住居となつた。モリエール一座がこゝに引き移つたのが王弟殿下の結婚式の擧げられた一六六一年であつたことは、偶然ではあらうが、一座が王弟專屬であつたゞけに、興味深く思はれる。

さてパレー・ロワイヤルには立派な演劇場が附屬してゐて、リシュリュー僧正が屢々豪華な演劇會を催してゐたのであつた。（モンドリーがこの劇場で「スミルヌの盲人」を演じたことは前に記した。）Eugène Despois に據ればこの劇場は當時巴里に於て、本來劇場として建てられた唯一のものであつたといふ。（le Théâtre français sous Louis XIV, p. 33.）然しこの當時同劇場はかなり荒廢してゐて大修理を要したし、また私的劇場を公衆劇場に變改する必要もあつた。これに要する費用は悉く王室によつて負擔せられたことは前に記した通りである。

この機會に於て特記す可きことは、ルヰ十四世がモリエールに對して示した特別の寵遇である。從來のプチ・ブルボン劇場もさうであつたが、この度のパレー・ロワイヤルも亦王に屬する宮殿であつた。（これがオルレアン公所有となつたのは一六七二年のことである。）而も移轉に關してはできる限りの恩典が一座に許與せられたのであつた。このことはモリエール及びその一座に多大の誇りと心强さとを與へたばかりでなく、彼等に對する公衆―特權階級並び

に一般市民――の評價に非常な重みを附け加へたことは疑のないところである。

さてこの劇場新裝の完成するまで、一座は休演の已むなき立場に置かれたのであるが、この期間一座は出張興行(les représentations en visite)によつて生計を立てゝゐたのであつた。この出張興行は當時の劇團が頻繁に行つてゐたものであるが、主として王侯貴族等の召に應じて、その宮邸で行ふ非公開の演出であつた。非公開である爲に、當局から上演禁止を宣告せられてゐた脚本をも上場することのできる場合もあつた。例へば「タルチュフ」の如きは、一部カトリック教徒達の要請によりルヰ十四世がその公開上演を許さなかつた期間に於ても、一六六四年九月、ヴィレール・コートレー(Villers-Cotterets)のオルレアン公の宮殿に於て、パレー・ロワイヤル一座によつて演ぜられて居り、また、同年十一月二十九日にはコンデ公(le prince de Condé)の召により、レンシー(Raincy)に於て一座は「タルチュフ」を演じてゐる。またその翌年の十一月八日にも同じ所でこの戯曲が上演せられてゐる。この種の非公開上演は戯曲「タルチュフ」の價値を裏書し、一般大衆の中にこれに對する好奇心を挑撥し、ひいてはその上演解禁要望の輿論を高調することに大いに役立つたのである。かやうに出張興行は劇團の名聲、收入を增したことは勿論、尙その上に場合によつては上演戯曲に對する世評に影響を與へることが多大であつたのである。

一六六一年一月二十日に、パレー・ロワイヤル劇場に於ける一座の初演が行はれた。プチ・ブルボン劇場閉鎖以來約二ケ月を閲してゐた。「獨り合點のコキュー」(le Cocu imaginaire)がその演物であつた。これが三回連續上演せられた後、「嗤ふ可き才媛」(les Précieuses ridicules)が續いて上演せられた。新劇場の蓋あけに當つて、既に試驗ずみの二作を選んだのは、經營者としてのモリエールの愼重な配慮であらう。

以後モリエールが歿する迄、一座はこの劇場に據り續けた。その間十二年、競爭劇場、殊にブルゴーニュ宮劇場の妨害、劇作家仲間の嫉視、モリエールの或る種の作品（L'Ecole des Femmes, Don Juan, le Tartuffe 等）によつて誘發せられた一部貴族階級、僧侶階級の迫害、彼の一二の作品の不成功（例へば Don Garcie の如き）等によつて、モリエールの作家としての生命が脅かされ、一座の衰滅が懸念せられたことも幾度かあつたが、ルキ十四世の絶大な庇護と、座員の固い結束と――これにはモリエールの人格の魅力が大いに與つてゐる――そして彼の天才によつて次々に放たれた傑作の數々によつて、度々の難關を切り拔けたばかりか、一座の名聲は年を追うて高まり、財政も豐かになり、遂にはブルゴーニュ宮を凌ぐ程の牢固たる地盤と信望とを持つに至つたのであつた。

以下この期間の重要な日附を拾つてみよう。

一六六二年、先にアルプスを越えて歸國したイタリヤ劇團が殆んど同じ顏ぶれでパリに戻つて來た。そしてパレー・ロワイヤル劇場に於てモリエール一座と交替出演することを許された。即ち兩座はプチ・ブルボン時代の隣人の誼みを新たにしたわけであつたが、この度はイタリヤ人達の方が非常日を取らなければならなかつたし、その上一六五八年にモリエール一座から受取つた一・五〇〇リーヴルの賠償金を返却することを命ぜられたのであつた。

同じく一六六二年の春、カルナヴァルの最終日（le mardi gras）にモリエールはアルマンド・ベジャール（Armande Bejart）と結婚した。アルマンドは爾來モリエール嬢（Mademoiselle Molière）と稱して、一座の女優となつた。彼はこの時四十歳であり、彼女は漸く二十歳であつた。このアルマンドは戸籍上はマドレーヌ・ベジャールの妹であつたが事實はマドレーヌの娘であつたことは殆んど疑がなく、また當時の人々にもさう信じられてゐた。モリエールがアル

マンドに對して抱いた運命的な愛着、兩人の結婚生活の不幸、この問題がモリエールの一身上に捲き起した讒謗の暴し等に關してはモリエールの評傳に讓つてこゝには省くことにする。

一六六四年五月七日から十三日迄の七日間、ヴェルサイユ宮に於てルヰ十四世治世を通じ空前絶後といはれた大園遊會、「魔法の島の歡樂」(les Plaisirs de l'Ile enchantée) が催された。この當時モリエールは官廷作者とも謂ふ可き地位におかれてゐて、ルヰ十四世が催す種々の宴遊の立案に參畫し、且つその實施をも分擔してゐたのであつた。從つてこの大園遊會に於ても一座を率ゐて或は美裝行進(パラード)に出演し、或は喜劇を演ずるなど奔命に疲れてゐたのであるが就中第六夜に於ける「タルチュフ」(le Tartuffe) の最初三幕の初演は一つの重要な日附である。蓋しこの戯曲がその後一六六九年二月五日にパレー・ロワイヤル劇場に於て、五幕の形になつて公演せられる運びに至るまでの、約五ケ年の歳月は所謂タルチュフ受難時代であつて、モリエールは有力なる一部カトリック教徒團と眞に血の滲むやうな苦鬪を續け、遂に國王の公演許可を獲得するに至つたのであつた。かくてモリエールは形式上その反對者達に打勝つた譯であつたが、この事件の爲に彼がカトリック教徒達の中に植え込んだ怨恨、憎惡の情は恐る可きものがあつた。謂はゞモリエールは滿身創痍を被つて漸く勝利を得たのであつた。

一六六五年八月、モリエール一座はセン・ジェルメン (Saint-Germain) 王宮に召されてゐた。王は一座に六千リーヴルの年金を賜はることになつた。その上、王は王弟フィリップと交渉して一座を自分の方に讓り受けることにした。かくして一六五八年以來王弟殿下專屬劇團であつた一座は、こゝに、國王附劇團 (la troupe du Roi) の肩書を許されることになつた。ブルゴーニュ宮劇場の一座が從來王室附劇團 (la troupe royale) と稱してゐたのに對し、聊か字句に

差異を附してあることに注意すべきである。メーナール（Paul Mesnard）はモリエール一座の肩書をブルゴーニュ宮一座のそれと較べて、前者は國王の一身に屬する旨を特に强調して居るが故に、後者よりも一段と名譽のものと思はれると云つて居る。（Notice biographique sur Molière, p. 326.）この見解には異論の餘地があると思はれるが、畢竟王室附劇團の肩書は、名詮自性ブルゴーニュ宮劇團がルヰ十三世の治世以來謂はゞ世襲財產の如くに王室に屬して來た事實に適應してゐるし、國王附劇團の肩書は換言すればルヰ十四世附劇團であつて、モリエール一座の場合によく應つてゐるのである。私一個の考としては「國王附」の稱號は寧ろ「王室附」の稱號の既得權に對する遠慮から選ばれたものではなからうか。蓋し王室附劇團は前にも記した通り世襲を意味するに反し、「國王附劇團」はこの場合としてはルヰ十四世一代の專屬を意味するのであつて、特權としては前者の方が重大であると考へられるからである。但しこれは單なる名稱の上の問題であつて、事實としてモリエール一座が特に王の愛顧を受けてゐたことは疑ふ餘地がないのである。さてこの恩寵が「タルチュフ」受難時代の最中に與へられたといふことは、王のモリエールに對する信任の最も顯著な表明であつて、モリエールの敵をして意氣沮喪せしむるに十分であつたのである。

一六七三年二月十日（金曜日）、「氣で病む人」（le Malade imaginaire）がパレー・ロワイヤルで初演せられた。この戲曲はモリエールの最後の作品であるといふことでも意味が深いが、尙彼が病氣を押してこの喜劇の主人公「氣で病む人」を演じつゝ重態に陷り殆んど舞臺の上で最後を遂げたと云つてよい位の急逝を遂げたことを想起すると、飽くまで劇的であつた彼の生涯の終幕として誠に感慨の深いものがある。それは同月十七日（金曜日）のことで、「氣で病む人」の第四回目の上演の日であつた。當時モリエールは作者としてまた劇場主としての過度の勞働の爲甚しく健康

を害してゐた上に、精神的の打擊が累積して彼の心身を打挫いてゐた。妻との間の葛藤もその一つであつた。その前年の九月に彼の唯一の希望であつた男子を生後一ケ月ならずして失つたことも大きな痛手であつたに違ひない。（モリエールの男子は二人とも夭折した。）その上彼はその頃ルヰ十四世の思寵の衰へ始めた兆候を感じてゐたに違ひないのである。少くとも王の恩寵に關して恐る可き競爭者が出現したことを痛感したに違ひないのである。イタリヤ人リュルリ（Jean-Baptiste Lulli）がこの競爭者であつた。フィレンツェ生れのこの作曲家は無名の一樂人から身を起して着々とルヰ十四世の信任を獲得していつた。作曲家としての才能も豊かであつたが、野心と陰謀に富んで居り、當時君寵を一身に集めてゐたモリエールに巧に取り入り、彼の作品の音樂は悉くリュルリの作るところであつた。le Mariage forcé; l'Amour Médecin; Monsieur Pourceaugnac 等皆さうであつた。然しリュルリの野心と自負とは喜劇に附隨する舞曲を作曲することでは滿足しなかつた。あたかも一六六九年六月二十八日、ルヰ十四世により「全王國内にオペラ院即ちイタリヤ風に倣つたフランス語による音樂演戯の設立の爲の勅許狀」（lettres patentes du Roi, pour établir, par tout le royaume, des Académies d'Opéra, ou représentations en musique en langue française, sur le pied de celles d'Italie.）がペルレン（Pierre Perrin）なる僧侶に與へられ、同時に他の如何なる者も王國内に於て、特權者の許可なくしてオペラ即音樂入り演劇を演ずることを嚴禁せられたのであつた。この勅許狀はフランスに於けるオペラ劇場の開設の出發點をなすものとせられてゐる。

ペルレンは直ちに作曲家キャンベール（Cambert）その他一二の協力者と結び、オペラ劇場建設に着手した。それは現今の巴里の第六區、マザリーヌ街（Rue Mazarine）の第四二番に當る地點であつて、從來そこにあつたブーティユ

掌球場（le jeu de paume de la Bouteille）を取壞して新しい劇場を建設したのであつた。この劇場は嘗てモリエールが貴顯劇場（イリュストル・テアトル）の旗上げを行つたメティエ掌球場と極く近い距離にあるのであるが、（メティエ掌球上はマザリーヌ街の第十二、第十四番地）尙不思議なことには、モリエールの死後その一座がパレー・ロワイヤルを去つて移つて來たのがこのオペラ劇場であつたのである。

さて一六七一年三月、新劇場に於て壯大な開場式が行はれ、ペルレン作キャンベール作曲のオペラ「ポモーヌ」（Pomone）が初演せられ大成功を收めた。かくしてフランスに於けるオペラ劇場は創設せられ、オペラの隆盛は約束せられたのであつたが、忽ちにして創設者達の間に不和を生じ、協調が破れてしまつた。この間隙を見て取つた陰險なる策士リュルリは、國王の信任の厚いのを利用し、ペルレンに與へられた勅許狀の取消しを乞ひ、改めて自分に王室附音樂院（l'Académie royale de musique）を設立する勅許狀の下附を願つて遂にこれを獲得したのであつた。それは一六七二年三月のことであつた。リュルリの得たこの特權は他のいかなる劇場にも、舞踊と音樂とを嚴禁するものであつたので、パレー・ロワイヤル劇場は直ちにこれに抗議した。云ふ迄もなくモリエールの喜劇の中には、前記の諸作品のほかにも、舞踊と音樂とを含むものが少くなかつたのであるから、王室附音樂院の特權は一座の上演種目に大打擊を與へるものであつた。この抗議の結果越えて四月、勅令により一座に六名の歌手と十二名のヴイオロン手が許されたがそれ以上は如何にしても許されなかつた。モリエールのリュルリに對する憤激は察することができる。その一つの現れとして、彼は同年七月にパレー・ロワイヤル劇場に於て、「エスカルバニャス伯爵夫人」（la comtesse d'Escarbagnas）の初公演に當り――この喜劇はその前年十一月、セン・ジエルメン宮に於て、王弟の再婚祝宴の際に餘興として演ぜ

られたのであるが、――これに挿入上演した舊作舞踊入り喜劇、「强制結婚」(le Mariage forcé) の音樂を改めてシャルパンチエ (Charpantier) に依囑し、リュルリ作曲のものゝ代りとしたのであつた。また「氣で病む人」の音樂も從來の例を破り、モリエールはシャルパンチエに依囑したが、シャルパンチエが作曲に當つて王室附音樂院の特權たる禁止條項を守らなかつた爲に、リュルリはその特權を楯にとつてシャルパンチエの作曲に削除を加へ、これを片輪にしてしまつたと云はれてゐる。(Mesnard: Notice biographique, p. 428)

かやうにモリエールとリュルリとの仲は、モリエールの死の前年以來完全な破裂となつてゐる。モリエールがリュルリの忘恩、不信に對して怒つたのは當然であるが、モリエールとしてはリュルリの背後に在つて彼を最負にし、かやうな專横を許し、モリエールの被害、不面目を顧慮しないルヰ十四世に對して、云はうやうのない不滿を感じたことが察せられるのである。誠に因果は廻るものであつて、嘗てブルゴーニュ宮劇場の俳優達をして切齒せしめたモリエールの恩寵も、今は新來のオペラ作者へと移つて、今度はモリエールをしてそゞろに秋風の冷やかさを嘆ぜしめる順番となつたのであつた。

グリマレーのモリエール傳 (Grimarest: la Vie de M. de Molière) によれば、モリエールは最後の日、劇場に出勤する前に、その妻と愛弟子ミシェル・バロンとの面前で、苦い苦い述懷をしてゐる。

「私の生活が惱みと樂しみと五分々々に混つてゐた間は、私は幸福だと思つて來た。然し今日では、一瞬の滿足も、一瞬の慰みも期待することができず、唯苦勞ばかりに苛まれ通しなのだから、私はもう御免かうむる時だと思ふ。私はもう、束の間も責め手を弛めてくれない苦痛と不快とに双向ふ力が無くなつた。」

何がモリエールをしてかくまで苦々しい厭世觀を抱かせたのであらうか。先に述べた如き家庭的の悲哀、事業上の心勞、病苦の爲の精神力の衰へ等もそれ〴〵一因であることは疑ひが無いが、この場合かくまで彼の希望を失はしめてゐるものは、ルヰ十四世の恩寵の衰へであつたと我々は考へざるを得ない。フランスの王朝時代、特にルヰ十四世の如き絶對專政君主の治下に於て、國王の恩寵といふものが如何なる意味を持つかは、我々の想像の外である。その上例へばコルネイユ、ラシーヌの如き作家の場合と、モリエールの場合とでは、王の庇護の有無の及ぼす影響が甚しく異るのである。モリエールの如くその諷刺的作品によつて貴族階級、宗教家階級の中に根深い怨恨を植えつけ、而も從來君寵によつて、謂はゞ虎の威を借る狐の如く彼等を揶揄し、醜弄して來た者が、一朝君主の愛護を失つた場合の恐る可き運命は當のモリエールならずとも豫見するに難くないのである。

かくしてモリエールは遂は一六七三年二月十七日、五十一歳で歿した。作者であり、主演俳優であり、且つ支配人であつたモリエールを突如喪つてしまつた一座の周章、落膽は名狀すべからざるものがあつたに違ひない。不幸中の幸として從來モリエールの右腕となつて働いて來た實直なラ・グランジュが、漸く三十歳で寡婦となつたアルマンドを助けて善後處置に全力を盡したのであつた。ラ・グランジュの記錄によればモリエールを失つてその一座が混亂に陷つてゐる樣子を見た國王は、一座をブルゴーニュ宮劇場に併合せんとの意思を漏らしたやうである。然しそれが實現の運びに至る前に、一座はパレー・ロワイヤル劇場を追はれる運命を持つたのであつた。モリエールの生前既に敵となつてゐたリュルリが、その主宰する王室附音樂院の本據として、パレー・ロワイヤル劇場の使用方を請願し、國王はこれを許可したのであつた。リュルリの辣腕もさること乍ら、ルヰ十四世の彼に對する最負の度もこれによつて推測す

ることができるのである。かくてモリエール一座はその年の演劇季節の終りを期とし、彼の死後十二回の演出を名残りとして、彼等の苦闘と光榮の記念塔とも謂ふ可きパレー・ロワイヤル劇場を去つたのであつた。

八

ゲネゴー劇場

モリエール一座は劇場を失ふのと前後して、(同年復活祭の休演中に)、バロン (Michel Baron)、ラ・トリーエール (La Thorillière)、ボーヴァル (Beauval) 夫妻の四俳優をブルゴーニュ宮劇場に引き抜かれた。バロンは年少ではあつたがモリエールに愛せられ、彼の死の床にも侍り、また彼の死後一週間を經て一座が「人間嫌ひ」(le Misanthrope) を上演した時、選ばれてアルセストの役を演じた程で、一座の重要な俳優であつた。彼が一座の危機を見棄てゝブルゴーニュ宮へ走つたことは、如何にしても辯護の餘地の無い忘恩、背信の行爲と云はねばならない。他の三名もそれ〴〵有用の俳優であつたので、この引抜は一座にとつて大きな損失であつた。この勢力減少を補ひ且つ死んだモリエールの役所を勤めさせる爲にマレー劇場第一の俳優であつたロジモン (Claude la Rose, surnommé Rosimond) がとり敢えず契約せられた。彼は勝れた喜劇俳優で、モリエールの役の殆んどすべてを繼承した上、作者としても幾篇かの喜劇を書いた。その作品は鈍重且つ粗野であるけれども、當時の觀衆には大いに愛好せられたのであつた。要するに一座としてこの場合最も有用な人物であつたことは間違ひはないのである。

一六七三年五月二十三日、モリエール未亡人とラ・グランジュとは、マザリーヌ街に在るブーテイユ掌球場跡の劇場を賃借する契約を結んだ。これは前記の通り、ペルレンによつてオペラ劇場として建築せられ、その後彼の特權消滅

と共に不用に歸してゐたものであつた。その位置がゲネゴー街（rue Guénégaud）の突當りであつたのでゲネゴー劇場（le théâtre Guénégaud）と稱せられた。これに遲れること一ケ月、六月二十三日附の勅令は、從來パレー・ロワイヤル劇場に據つてゐた國王附劇團に對し、ゲネゴー劇場に據ることを許可し、且つ同劇團の所有に屬する劇場用具一切をパレー・ロワイヤルからゲネゴー劇場に移轉することを許可してゐる。同時にこの勅令はマレー劇場の俳優達に對し、同劇場に於ても、巴里市内の他の場所に於ても今後芝居を演ずることを禁じてゐる。（Lintilhac: Histoire générale du théâtre français, tome III, p. 12-13）この間の消息につき、Frères Parfaict の Histoire du Théâtre français によれば、ルキ十四世が巴里市中に二個以上のフランス劇團の存在することを欲せざる旨を言明したので、宰相コルベールはマレー劇場に命じて男優女優の名簿を呈出せしめ、その中の優秀な者を選拔してパレー・ロワイヤル劇團に編入したとのことである。國王が何故に巴里市中に二つ以上の劇場の存在を欲しなくなつたか、その動機は知る可くもないが、この頃マレー劇場が不振の極に達し、到底衰運を挽回する見込みが無かつたことは事實であつた。

とにかく、かくして從來鼎立の形であつた巴里市中の三つのフランス劇場の中、マレー劇場の一座と、パレー・ロワイヤル劇場の一座とは、一六七三年六月二十三日を以て併合を行つたのであつた。而して右の勅令にも見える通り國王附劇團がパレー・ロワイヤルからゲネゴー劇場に移つた譯であるので、新しいゲネゴー劇團は依然として國王附劇團の肩書を續けたのであつた。併合の際の俳優の數は、パレー・ロワイヤル側、男四名、女五名、マレー側、男六名（ロジモンをも含めて）女四名であつた。パレー・ロワイヤル側としてはデュパルク夫妻、マドレーヌ・ベジャール等は既にこの世を去り、ド・ブリー（De Brie）とモリエール未亡人とが主演女優となつて居り、男優としてはラ・グランジュ、

ド・ブリー、デュ・クロワジー、ユベールの四名だけであつた。

マレー側の俳優の中では前記ロジモンを除いて大したものは一名も無かつた。從つて併合後の一座は數に於てこそ優勢になつたものゝ、質に於ては從來のパレー・ロワイヤル一座に一段の輝を加へる程のことはなかつたのである。唯男優の一人ゲレン（Guérin d'Estriché）はその後一六七七年にモリエール未亡人と結婚したことによつて、有名である。天才モリエールとの結婚生活に不幸であつたアルマンドが、凡人ゲレンと誠に圓滿な夫婦生活を送つたことは當時相當の話柄になつたやうである。

Elle avait un mari d'esprit, qu'elle aimait peu;

Elle en prend un de chair, qu'elle aime davantage.

（彼女は才智勝れた夫を持つてゐたが、碌に愛さなかつた、

彼女は今度は肉體的な夫を持つたが、その方を餘計に愛してゐる。）

といふ諷刺句がゲレンの生前既に流布せられてゐた。

さてゲネゴー劇場は一六七三年七月九日、「タルチユフ」を以つて初開場を行つた。續いて「女學者」（les Femmes savantes）、「吝嗇漢」（l'Avare）、「人間嫌ひ」（le Misanthrope）等、モリエールの作品のみが交互に上演せられた。然しモリエールの生前に於てさへ、絶えず新作によつて上演種目を更新しなくては、觀衆を呼ぶことが出來なかつたのである。モリエールの死後、當分の間は故人に對する追慕の爲に觀衆は彼の作品を觀ることを好んだが、これは一時的の現象であつて、舊態依然たるレペルトワールは觀衆に飽きられるにきまつてゐた。どうしても新しい作者を求め

ることが必要であつた。この場合に、ド・ヴィゼー（Donneau de Visé, 1638-1710）と、トマ・コルネイユ（Thomas Corneille, 1625-1709）の二作家が一座の爲に豐富な作品を供給してくれたことは、一座にとつて勿怪の幸であつた。この二人の作品の價値については今日定評があるからこゝには問題にしないでおく。唯トマ・コルネイユは多作な、而して時代の嗜好を見るに敏な作家であつたので、彼の作品は成功の連續であつた。「未知の人」（l'Inconnu, 1675）の如きはゲネゴー劇場の衰運を挽回した程の成功であつたので、一座は金六十ルヰを彼に贈つて專屬作者としたくらゐであつた。一六七七年にトマはモリエールの散文喜劇「石の饗宴」（le Festin de pierre）即ち「ドン・ジュアン」を韻文に書き改め、且つ信心家を怒らしめる個所を改竄して一座に上演せしめ、成功を收めた。

ド・ヴィゼーは作家であつた上に、當時唯一の文藝誌であつた「メルキュール・ギヤラン」（le Mercure galant）の主筆であつたので、同紙を通じての後援が大いにものを云つてゐた。作者としても、トマ・コルネイユとの合作「シルセー」（Circé, 1675）の如きはゲネゴー劇場空前の成功であつた。嘗て「ゼランド」又は「妻の學校の眞の批評」（Zélande ou la Véritable Critique de l'Ecole des Femmes, 1663）を書いてモリエール攻擊の先鉾をつとめた彼が、モリエール亡き後の一座の有力な後援者となつたのも、思へば不思議な廻り合せといふ可きである。もつともモリエールの晩年既に兩者の間に和解はできてゐた。

一六七七年一月三日、ゲネゴー劇場はプラドン（Nicolas Pradon）の悲劇「フエードル」（Phèdre）を上演した。これはラシーヌの悲劇「フエードル」を失墜せしめる計畫の下に、ブイヨン公爵夫人（la duchesse de Bouillon）――マザレン宰相の姪――の一派がプラドンに命じて同一主題を用ひ三ケ月の日限で書き上げさせたものであつた。謂はゞ

陰謀の道具として作られたもので、その價値に於てはラシーヌのそれと比較になるものではないが、新進作家プラドンはこの恥づ可き仕事を、光榮として喜んで果したのであつた。ラシーヌの「フェードル」は同年一月一日、ブルゴーニュ宮劇團によつて、――所はブルゴーニュ宮劇場であつたか、或はヴェルサイユ宮であつたか、聊か明瞭でない、(cf. les Grands Ecrivains de la France, Oeuvres de Racine, tome III, p. 245-247)――初演せられ、女主人公の役は名女優シャンメーレ(la Champmeslé)であつた。(文學研究第十四輯拙稿五二頁參照)。プラドンの方の女主人公の役はド・ブリー嬢も、モリエール嬢もこれをひき受けなかつたので、デュ・ペン嬢(mademoiselle du Pin)がこれを演じた。(序で乍ら附言すれば、當時男優の稱呼には氏(Monsieur)が用ひられたが、女優のそれには夫人(Madame)を用ひることが許されなかつた。それは俳優を卑める社會が科した掟であつた。從つて女優はすべて嬢(mademoiselle)と呼ばれた。或はまた定冠詞 la を附して、ラ・シャンメーレ、ラ・デュ・パルク等とも呼ばれた)。ブイヨン夫人は兩座の棧敷(les loges)を六日分買ひ占め、その爲に一萬五千リーヴルを費したと傳へられる。かやうな根强い陰謀は相當效を奏して、ラシーヌの「フェードル」は一時失墜を懸念される程の不入りを見たが、時の經つに從つて陰謀の力は消散し、公衆の正當の判斷はラシーヌの「フェードル」に決定的の勝利を與へるに至つた。これに反しゲネゴー劇場の「フェードル」は最初は異數の盛況を見てブルゴーニュ宮劇場に打勝つた如く見えたが、興行成績は時と共に下り坂となり、三ケ月の後には全然顧みられなくなつたのであつた。

右に述べた「石の饗宴」の改作と、プラドンの「フェードル」の上演とはゲネゴー劇場が犯した二つの過失として潔癖な演劇史家に非難せられてゐるが、然し劇場經營の衝に當る者としてこの程度の政策は許されるものではあるまいか。

殊に「石の饗宴」はモリエールの生存中十五回の上演を見たのみで、無言の壓迫の爲に中絶せられ、上梓もせられなかつた作品である。これがトマ・コルネイユの改作の爲に無難に、大成功を以て上演せられ、劇場の米櫃となり了つたのであつた。（自後、一八四六年に、コメディー・フランセーズが原作の「石の饗宴」を再演するまで、「ドン・ジュアン」と云へば必ず韻文の喜劇が用ひられたのである。）また「フェードル」の問題に關しては、さきにラシーヌが「アレクサンドル大王」の脚本の問題でモリエール一座を裏切る如き行爲をなしてゐるのを思へば（文學研究第十四輯、拙稿第五一頁參照）一概にゲネゴー劇場のみを責めることはできないと思ふのである。

一六七九年復活祭の休暇後（序で乍ら、當時の演劇季節は復活祭休暇を境として更まるのであつた。從つて俳優の移動も多くはこの休暇を期として行はれた。）名女優シャンメーレ孃がブルゴーニュ宮を去つて、ゲネゴー劇場に加入した。彼女と共にラシーヌのレペルトワールももたらされたことは云ふまでもない。これはゲネゴー劇場にとつて大きな幸運であり、それだけにまたブルゴーニュ宮にとつて打擊は大きかつた。更に同劇場の痛手となつたのは、悲劇俳優ラ・トリーエールが一六八〇年七月二十七日に死んだことであつた。この重なる損失によつて、ブルゴーニュ宮劇場は殆んど致命的な打擊を被つてしまつた。この打擊がブルゴーニュ宮とゲネゴー劇場との併合の直接動因となつたことは明かである。八月十八日附の勅令は兩劇場の併合を命じ、且つ新劇團に加入すべき俳優名を列記し、この勅令に從はざるものは巴里市に於て出演することを得ずと命じてある。俳優の數は男優十四名、女優十二名であつた。事實上の併合は同月二十五日、ゲネゴー劇場に於ける「フェードル」と「オルレアン行き乘合馬車」（les Carrosses d'Orléans, comédie en un acte de Lachapelle）との上演から實現せられた。

さてイタリヤ人劇團は先に國王附劇團がパレー・ロワイヤル劇場を追はれてゲネゴー劇場に移つた時、共々に同劇場に移り、非常日の出演を行つてゐたのであるが、今やブルゴーニュ宮劇場が無住となつたので、同劇場の方に移ることゝなつた。從つて併合後のフランス人劇團は從來火、金、日の三日の出演の習慣を廢して毎日出演の例を開いたのであつた。

次で十月二十一日附の勅書(la lettre de cachet)は、ブルゴーニュ宮劇場とゲネゴー劇場とに據つてゐた兩劇團の併合を行ふことが、演出を完璧ならしむるに適當なりとする國王の叡慮を表明し、正式に併合を命じ、俳優名簿を掲げ更に劇團の技藝を向上せしむる爲巴里市中に於けるフランス人劇團としての獨占權を賦與することを宣言してゐる。從來イタリヤ人俳優(les comédiens italiens)に對し、フランス人俳優(les comédiens français)と稱すべきものが、三團體(後には二團體)併存してゐたのであるが、此の時以來一團體となり、從つてフランス人俳優の名稱が直ちに併合後の新劇團の俳優を指すことゝなり、フランス人劇團(la comédie française)なる名稱もこの時以來始めて、固有名詞的意義を持つことゝなつたのである。コメディー・フランセーズが正式に成立したのは實にこの時である。今日もなほ同劇場の廣告ビラ、プログラム、書翰箋等に用ひられる創立期が一六八〇年となつてゐるのはこの故である。然し乍らその事實上の誕生は一六五八年のルーヴル舊王宮に於けるモリエール一座の最初の天覽劇の日と見る可きではないであらうか。または更に溯つて一六四三年の貴顯劇場旗上げの日と見る可きではないであらうか。かく見てこそ、「モリエールの家」(la Maison de Molière)の別名が始めて深い意味を持つことになるのである。

併合した兩劇團は併合前と同樣に年金を給せられてゐたのであるが、一六八二年に至つて、一萬二千リーヴルの年

金が公式に設定せらるゝに至つた。この年金が所謂 subvention であつて、コメディー・フランセーズが le théâtre subventionné と稱せられるのはこの故である。ルヰ十四世と宰相コルベールとの署名の下にこの年金を規定した墨附（le brevet）は、今も尙コメディー・フランセーズの俳優控室（le foyer des artistes）に恭しく掲げられてゐる。

かくしてフランス第一の、最初の官設劇場は正式に創立せられた。十七世紀を通じて幾多の波瀾曲折を經たフランス人劇團が、遂にこゝに整備した、充實した劇場に到達するまでには、國王の絶大なる保護、奬勵がその功績の大半を占めてゐることを忘れてはならない。勿論國王の俳優團に對する命令は絶對的であつた。彼等は國王の專横、氣紛れ、物好きの爲に如何ほどの苦汁を嘗めさせられたか分らない。モリエールの如き自尊心、名譽心の强かつた人物すら、國王に對する態度、言辭には、今日の我々に多少の苦々しさを感ぜしめる程の阿諛、卑屈の色が見られるのである。然し乍らルヰ十四世は眞に演劇を愛好したのであつた。宮中に於ける饗宴に演劇は缺く可からざる餘興であつた。時としては王自ら劇中の一人物に扮することさへあつた。また王宮の一部を公衆劇場として開放したことも既に記した通りである。一國の元首がかくまでに演劇を愛好し、これを保護したことは空前絶後のことであらう。して見れば王の治下に於て世界に類例のない官設劇場が完成せられたことは決して偶然ではないのである。

九

コメディー・フランセーズ

併合後のゲネゴー劇場の國王附劇團は、當時フランスに於ける最も優秀なる俳優を網羅して、その數に於ても、その技藝の多種多樣、圓熟に於ても、他に比類の無い綜合體を形成したのであつた。勿論併合當初に於ては、兩劇場の

上演種目が混肴せられる爲に、配役の悶著がかなり起つたものであらう。元來新作の配役は作者の註文通りに行はれたのであるが、この場合は舊作に關する配役の問題なのであつた。そこで、コルネイユ、ラシーヌ、キノー等の諸作家は、その舊作の配役を改めて指定せねばならなかつた。他方觀衆の興味も兩座の併合によつて大いに煽られたやうである。併合後最初の出演、即一六八〇年八月二十五日の「フェードル」と「オルレアン行き乘合馬車」の興行成績は、その二日前の同一番組の興行收入の二倍以上に上つたのであつた。

然しフランス人劇團は永くゲネゴー劇場に據つてゐることはできなかつた。一六八七年六月二十日、一座は同劇場の立ちのきを宣告せられた。その理由は次の通りである。ゲネゴー劇場の間近、今日綜合學士院（l'Institut）の在る土地の一部に、丁度その頃「四箇國校」（le collège des Quatre Nations）が開設せられた。これはマザレン宰相の遺贈によつて建てられ、特に宰相の在職中締結せられたムンスター（Munster）條約及びピレネ條約によつて、フランスに編入せられた四ケ國 Pignerol, Alsace, les Pays-Bas, le Roussillon の良家の子弟で學資に乏しい者を各國十五名宛六十名を收容して、無料で教育を施すことを主要目的としてあつた。宰相の遺贈は一六六一年に行はれてゐたが、愈々開校の運びとなつたのは一六八八年十月一日のことであつた。ソルボーヌ大學がこの學校の總監督を委托せられ四名の博士が督學官（l'inspecteur）の資格で任命せられた。然るにソルボーヌの博士達はこの任命を受諾するに當つて、同校の間近にコメディー・フランセーズの存在することを教育上弊害ありとし、劇場を遠ざけることを要求したのであつた。この要求は受理せられ、劇場は三ケ月の猶餘期限付で移轉の宣告を下されたのであつた。一座は新しい劇場を建設する爲土地の物色に着手したが、國王の關心が昔日の如くでない今日、――その上國王は對外の諸問題に忙

殺されてゐた――モリエールの生前から彼の劇場に注がれて居たキリスト教徒の善意、惡意の反感は、落目となつた一座に對する排斥、嫌惡となつて、一座の土地買入れを頻りに妨害するので、契約は中々纏らなかつた。一座が或る土地に目星をつけて、國王の許可を得ると、その教區の司祭が必ず宗教上の理由により國王に許可取消を請願した。或る時は始めから許可を得られぬこともあつた。かくして一座は約十ケ所程の候補地を斷念した擧句、一六八八年三月八日、フォセ・セン・ジェルメン・デ・プレ新街（rue Neuve-des-Fossés-Saint-Germain-des-Prés）のエトワル掌球場（le jeu de paume de l'Etoile）を買收したのであつた。これは今日の第六區でアンシエーヌ・コメディー街（マザリーヌ街の延長）の十四番地に當る所で、街の名の「舊コメディー」はこゝに建てられたコメディー・フランセーズに因んで後にかく改稱せられたのである。セーヌ河の左岸、右岸を住所を求めて喪家の犬の如くさまよつた擧句、結局落ち着いたのが、もとの劇場と殆んど同町と云つてよい位の、從つて四箇國校からも申譯だけ遠ざかつた地點であつたのは聊か皮肉に感ぜられる。この界隈とコメディー・フランセーズとはよく〳〵深い因緣があつたものである。さて直ちにこの土地に劇場の建築が始められ、一六八九年四月十八日「フェードル」と「心ならずも醫者にされ」（le Médecin malgré lui）とを以て、華々しく開場式が行はれた。この新劇場建設に就てコメディーは二十萬リーヴルの借りを作り、以後俳優連は各自の所得金からこれを償却しなければならなかつた。然し彼等は今度こそ自分達の劇場を持つたのであつた。爾後一七七〇年まで、約一世紀間彼等はこゝに據り續けたのであつた。

劇場は隆盛を續けた。コルネイユ、ラシーヌ、モリエールの作品が依然觀客に喜ばれ、主たる上演種目であつた。カンピストロン（Jean Campistron）、ボワイエ（l'abbé Claude Boyer）、ラグランジュ・シャンセル（Joseph Lagrange-

Chancel）等の亞流の悲劇、ダンクール（Florent Dancourt）、ルニャール（Jean-François Regnard）、デュフレーニー（Charles Rivière Dufresny）、ル・サージュ（Alain-René Le Sage）等モリエールの流を汲んだ新進作家の喜劇も番組を賑はした。かくしてコメディー・フランセーズは繁榮の裡に十七世紀を送つた。新しい世紀と共にコメディーはまた種々の難關に逢はねばならなかつた。

以上コメディー・フランセーズの淵源から十七世紀間のその沿革の年代記的略述を終つた。こゝで私はひとまづ本稿の筆を止めることにする。十八、十九、及び現世紀に亘る同劇場の歴史に就ては、次の機會に於て記述を續けるつもりである。唯最後に、コメディー・フランセーズの創設當時に於けるその組織、經營法の大略を記しておくことはあながち無意義ではあるまいと考へる。

一〇

國王に對する隷屬、國王から下賜せられる年金を別とすれば、コメディー・フランセーズの主體は俳優團であつた。俳優團は一個の組合（la société）の共同出資者であつた。コメディーの俳優が組合員（Sociétaire）と呼ばれるのはこの故である。出資といふのは彼等の技藝である。從つて理論的には各自の出資の價値は決して平等ではなかつたのであるが、組合は各組合員の出資を原則上平等と認め、彼等に對し平等の利益配當を行つた。利益配當の方法は誠に簡單であつた。毎興行の終了後、その日の收入が計算せられた。この勘定には各俳優が立會ふ權利を持つてゐた。唯、會計方（le trésorier）と、書記（le secrétaire）と、監査役（le contrôleur）の三役員は必ず立會はねばならぬ定めであつた。（これ等の役員は俳優中から選ばれ、全く無給であつた。）勘定ができると、日々の雜費が控除せられる。

若し共同で支拂ふ可き負債がある場合等はそれも差引かれる。かくして殘つたものが俳優の數に應じて等分せられ、即時配當せられるのであつた。この各自の配當分を la part と呼んだのである。各俳優は原則として全配當分（la part entière）を受けたのであるが、實際上は若く未熟な俳優、或は二、三流の俳優は半配當分（une demi-part）、四分の一配當分（un quart de part）に甘んじなければならなかつた。コメディー・フランセーズ成立の際の配當分の數は二十一と四分ノ一であり、全配當分の者は男優十名、女優七名、半配當分の者、男優四名、女優三名、四分ノ一配當分の者、男優一名、女優二名都合二十七名であつた。（一六八〇年八月十八日附の勅令中の俳優名簿では男優十四名となつてゐる。それはデュ・クロワジー（Du Croisy）が引退を命ぜられて名簿に載つてゐない爲である。然るにその後彼自身の希望と僚友の請願により二分ノ一配當分として復活したので、同年十月二十一日附勅書では男優十五名となつたのである。）一六八五年、配當分の數は二十三と定められ、この數は大革命まで變更せられなかつた。またこの頃から、配當分に預からず、給金を貰つて働く俳優の存在が始まつてゐる。コメディイ・フランセーズの隆盛、俳優の地位、收入の向上に連れ、この劇團に加入を望む者の多くなつたのは當然であつた。他方組合は、後に記す通り退職者に終身扶助料を拂ふ定めであつたから、組合に加入せしむ可き人物の選考に愼重となつたのも當然であつた。この爲に或る數の若手俳優を試驗的に舞臺に立たせて見る習慣が始まつたのである。今日テアートル・フランセーに存在する給金俳優（le pensionnaire）の制度の起源はこゝに溯るのである。

老齡或は疾病の爲組合脫退の已むなきに至つた者には、組合は一千リーヴルの終身年金を支給することになつてゐた。而してこの年金は隱退者の跡を襲つて組合員になつた者の負擔であつた。（因に一六八八年に於ける組合員の配

當分年額は約六千リーヴルに達したと云はれる。）尙組合員が死亡した場合には、その相續人に一千リーヴルの弔慰金が贈られる定めであつた。

一座の中には支配權を有する者は無かつた。唯前記三名の役員が、自然經營の任に當る譯であつた。ラ・グランジュ（La Grange）の如きは永い間、書記と會計とを兼務して、その溫厚な、實直な、堅忍な性格によつて、劇團の平和と隆昌とに多大の貢獻をしたものであつた。（尙ラ・グランジュに就ては前輯六七頁參照）

脚本の採用には別に委員會等は存在せず、全組合員の合議で決せられた。即ち作者が全俳優團の面前で自作を朗讀し、その後俳優團の多數決が採否を決定したのであつた。但し女優達はこの朗讀會に出席することは稀であつた。配役は作者の指定通りに決定せられた。但し第二組の配役を設ける場合は俳優側で自由に決定することになつてゐた。

かやうにコメディー・フランセーズの行政は頗る自治的に、民主的に行はれたのであるが、然し前にも記した通り國王の年金を受けて居る限り、その支配を受けてゐたことは勿論であつた。この國王の支配權は實際上は式部職貴族（les Gentilshommes de la Chambre）によつて代表せられてゐた。然し彼等は現今のテアートル・フランセーの支配人（l'administrateur）の如く經營の實務を執掌するのではなく、謂はゞ一種の監督官であつて、俳優間の紛爭等の場合に於て、その裁斷者となつてゐたのである。勿論重要案件に就ては間接に國王の裁斷を仰いだのであつた。

以上の如き劇團の機構はコメディー・フランセーズの創立と共に新たに作り出されたものではないのであつて、既にモリエールの時代から存在した劇團組織を踏襲したものに過ぎない。唯モリエールの時代には一座の結合が遙かに家族的色彩を帶びてゐたので、例へば退職後の年金の如きも特に規約に定めることなく、友誼的に解決せられたのであ

つた。然るにコメディー・フランセーズの創立と共に劇團が膨脹し、異分子も加はるに連れ從來の家族的色彩は失はれ公共物の性質が濃厚となり、萬事を規約によつて定めるの已むなきに至つたのであつた。然しこの時代に於ては規約と云つても誠に單純、幼稚なものである。以後年を經るに從ひ、因習が累加するに連れ、成文、不文の規約は煩雜、難解の度を加へるであらう。これ等の規約を更始し、統一する爲に一八一二年十月十五日「モスコー勅令」(le décret de Moscou) が、ナポレオン皇帝によつて署名せられるであらう。同勅令はコメディー・フランセーズの監督、組織、行政、會計、警察、處罰を規定して宛然一法典の觀がある。現在のテアートル・フランセーの機構を知る爲に缺く可からざる文獻である。次の機會に於てその要旨を紹介したいと考へてゐる。

參考書追加

Dussanne: la Comédie-Française.